



宮崎妙子の 与太話



伽藍

私、宮崎妙子は、走馬灯が見てみたい。

――という、何やらとても心配されるのではなからうか。この世の何もかもに絶望しきっているとか、生きてるのが辛くて辛くて死んでしまいたいとか、そんなことを思っていると、勘違いされるのではなからうか。

そんなことはない。

私、宮崎妙子は、至って普通の社会人である。大学四年でいつまでも内定が出ないことに焦って、焦って、漸く内定を貰えたと思ったらなんだか訳の判らない会社でほんのり将来に不安を覚えたりはしているけれど、当たり前で普通の、どこにでもいる二十三歳の女である。正直大分ブラック寄りの会社に入ってしまったなとは思っているけれど、とりあえず何事もなければ定時には帰れるし、一ヶ月後には残業代を含めた給料も振り込まれるはずだ。

四月の半ばに体調を崩して以来、どうにもこうにも整腸剤がお友達になってしまった気はするけれど、お陰で体重は落ちたし、結果オーライかななんて思っている。ルームシェアをしているから生活費は安く済むし、一先ず仕事を辞めない限りは当面飢え死ぬことはないだろう。

詰まり宮崎妙子という女は、どこにでもいる、それこそこの時期には見たくなくたって眼に入ってくるであろう、当たり前の新社会人の一人なのだった。

趣味は、読書。それから創作小説の執筆。そういうことになっている。少なくとも私の知人友人たちの間では、私はそういう人物として認識されているはずだ。

同期が高卒の新社会人ばかりで、ちょっとジェネレーションギャップに戸惑ったりする。いやいや私はまだまだ若い、はずだ。そうそう、まだ二十三歳。周りが十八歳ばかりだからって、落ち込んでなんかない。落ち込んでないってば。

さて、そんな私の話だ。朝は起きて、時間があればパンを食べて、きちんと朝からご飯を食べると同居人に怒られる。聞き流しながら仕事に行き、締め切りに間に合うかと胃をきりきりさせながらの業務が始まる。因みにお仕事は全くの新規事業で、正直新卒には荷が勝っている気がするのだが、まあそこは仕方ない。仕事の内容自体はなかなか楽しいので、あとは労務環境さえ改善されればわりと悪くない仕事なのだ。あと給料上げてください。なんだ、試用期間は時給制って。

終業時間になったらさくっと帰ることもあるし、運が悪いと上司の長話に付き合わされることになる。業務に慣れてきた四月の後半は、基本的に定時には帰れていたと思う。家に帰ったら同居人がご飯を作ってくれていて、ほっこりしながら夕飯を食べて、部屋でのんびりして、寝る。現状、私はそんな生活である。因みに今まで私は全く家事というものをしてこなかったので、同居人はなかなか私にキッチンのもを触らせようとしてくれない。お母さんってこんな感じだろうか、と考えたりする。

休みの日は、ごろごろしているか、図書館に行くか、友人と遊ぶかの三択だ。この前、体調を崩していたときには地獄を見たけれど、基本的には休日を満喫出来ていると思う。

そう、普通だ。私の生活は、普通の、どこにでもいる、二十代独身OLの生活だ。走馬灯なんて言葉、全く関わりなんてないだろう。当たり前だ、私だってそう思う。

だというのに、ここ最近、私がふと空き時間に考えることは、走馬灯が見てみたいということなのだった。全く、意味が判らない。

どこにでもいる社会人女性の、詰まらない日常である。こうやって文章に書き起こす意味すらないだろう。自分の鬱屈を晴らすためだけに、私はこうして小説を書いている。まともに小説を書くのだって随分としていないし、書き方なんて忘れてしまった。ただ、こうしてポメラに向き合っていると、何かを思い出す気がする。ぐらぐらと揺れている足下が、少しだけ安定する。

そうそう、足下だ。私はいつも、崖っぷちに立っている。勿論、物理的な話じゃなくて、精神的な話だ。ぐらぐらと落ち着かない、ほんの少しでもバランスを崩せば奈落の底に真逆様というような崖っぷちに、私はいつも立っているような気がするのだ。

そんなことを考えるのは、多分、家庭環境の所為だろう。まるで現実逃避のように、私はそう考えている。

私の家庭環境は、実はそんなに悪いという訳ではない。私がいかにいつも家族の愚痴を言っているから、友人たちは私の家が修羅場ばかりという想像をしているだろうけれど、実際にはそんなことはない、と思う。一般的な家庭というのをあまり知らないなので、よく判らない。

ただ私はほんの少しだけ、贅沢をしたいのだった。今は家族とは連絡を絶ってしまっているので、したかった、だろうか。

例えば誕生日を覚えていて貰うだとか、成人式を祝って貰うだとか、それこそ卒業を祝って貰うだとか。有り体に言えば、おめでとうという言葉が欲しかったのかも知れない。例えば、帰ったらご飯が用意してあるだとか、体調を崩したら世話をしてくれて貰えるだとか。そういう、ちょっとした贅沢を試してみたいのだった。

こんなこと、友人たちには決して話せないけれど、愛して欲しかったのだ。

否、愛されてはいたと思う。ただ、私とその愛情を素直に受け取らなかっただけだ。渡される愛情を素直に受け取るには私は両親を嫌い過ぎていて、両親だってどうせ捨てられると判っている愛情をいつまでも娘に向けようとは思わないだろう。要するに、そういうことだ。全部、私の自業自得なのだ。

けれど多分、私は両親に甘えていた。こうして実家を出て、完全にではないけれど関係を絶った今ですら、私は両親に甘えている。

母が病気で、今までまともに働いたこともないような女だから。父が短気で、ときに娘にも暴力を振るうような男だから。夫婦仲が険悪で、なのに他者を貶すときだけは仲良さげに振る舞う二人だから。

どこにでもある話だ。どこにでもありすぎて、これだけでは小説のネタにもならないような話だ。詰まらない、面白味のない、三文芝居にすら使えないような話だ。けれど私は多分、それを全部の言い訳にしているのだ。

私が卑屈なのは、両親の所為。嫉妬深いのは、両親の所為。幸せになれないのは、両親の所為。

全部、全部、全部、人生の不都合の何もかもを、私は家庭の所為にして生きてきたのだった。これ自体は、完全に私の悪癖だろう。私はある意味で、両親に依存して生きているのだった。

どんなに粹がっていても、経済的にほぼ自活していても、私は両親に依存していた。まるで駄々を捏ねる子供のように、私は彼らに甘えていたのだった。

それでいて私は、絶望的に独りだということも判っていた。例えば就職先が決まった友人が親に電話して、祝って貰ったと言っていたとき、死ぬほど羨ましかった。どんなに自立している相手でも、家族との繋がりを見せられるのが嫌だった。両親の文句を口にしながら、同じ口で親に何かをして貰ったという相手が憎かった。友人に引っ越し費用を親に負担して貰うのだと言われたとき、にこにこしながら心では蔑んだ。

私が両親のことを考えたとき、いつも浮かぶのは真っ暗な未来だけだ。祖父ほども年の離れた父親、病气持ちの母親。いつか彼らの世話をするのか、私が？ そんなの、冗談ではないと思った。今でも思っている。もしも抵抗の出来ない相手が、私に面倒をかけてきたとして、私は彼らに暴力を振るわない自信がなかった。いつかの昔に彼らが私にしたように、私が彼らに手を上げないとは言えなかった。寧ろ、喋るサンドバックくらいにしか思わないだろうとまで思った。

私が両親のことを考えたときに思い浮かぶのは、要するにそういった厄介事が全てなのだった。困ったとき、助けて欲しいときに、私には手を差し伸べてくれる人間がいなかった。無条件の庇護というものを、私は持っていなかった。友人たちですら、最後の最後には私を見限るだろう。友情を疑うのではなく、人間として当たり前の判断として、私にはそれが判っていた。

私はだから、崖っぷちに立っているようなものだった。セーフティネットのない中で綱渡りをしているようなものだった。背筋が冷えるような心地で、私はいつでもそれを感じていた。

ただ私は、私にはこの人がいる、というのを言ってみたかったのだ。無条件で甘えられる相手。甘えて許される相手。私は愛されているのだ、と実感させてくれる相手。

私には、誰もいなかった。友人と話しているときに不意に背筋が寒くなるのは、珍しくもないことだった。

だからかも知れない。

私はいつでも、自分が生きる意味を探しているのだった。

こんなことは、それこそ子供のうちに解決しているべきことだ。自分でもそんなことは判っていて、悩みですらない、笑い事にしかならないことなんて重々理解していた。それでも私は、その考えを捨てることが出来なかった。

ただ誰かに、生きていても良いのだと肯定して欲しかった。だからか私は、年甲斐もなく運命の相手なんてものに憧れていたりもする。本当に、致命的なまでに、私は幼稚な人間なのだった。

。

私が生きている意味って、本当にあるのだろうか。そんなくだらない疑問を抱えたまま、こんな年になってしまった。

大学のときには、そんなことを考える余裕もなかった。毎日働いて、働いて、夜になったら学校だ。四年になったら授業は減ったけれど、就活のことで頭がいっぱいだった。

大学の卒業式が終わって、引っ越しから漸く落ち着いた頃に、その疑問はふと、思い出したように私の心に再び浮かんだのだった。

多分、ちょうど不安定な時期だったからだろう。大学生でもない、かといって社会人でもない

、短い空白期間。その、いつもよりも尚更ぐらぐらと危なっかしい足下の隙を縫うように、その疑問は私の心に忍び込んだのだった。

正直な話、自分がそんな疑問を持っていたこと自体、私は忘れていた。そういえば、高校の頃はそんなことを真剣に考えていたな、と懐かしく思ったくらいだ。ただ私は、大学を卒業した時点で自分の人生の大半が終わったような心地でいた。ひたすら働いて、学費と食費を稼いでいたのが、終わってしまった。稼ぐことと、遊ぶことと、それから研究課題。それだけを考えていれば良かったのに、そのうちの大きな二つが、すこんと抜けてしまったのだった。稼ぐことはこれからもしなければいけないのに、寧ろこれからが本番のはずなのに、全然そんな風には思えなかった。終わった人生を無駄に引き延ばすのに、意味があるのか本気で判らなかった。なんとなく生きて、誰かに致命的な迷惑をかける前にひっそりと死ねれば、それで良かった。ほんの数日間だったけれど、死ぬことばかりを考えていたように思う。

仕事が始まって、その衝動はほんの少し落ち着いた。落ち着いたけれどやっぱり、私の足下はぐらついたままだった。

なんとなく、不意に私は、自分が酷く空っぽな人間であることに気付いたのだった。

否、嘘だ。本当は、ずっと前から気付いていたことだった。なんとなく今は考える時間が出来たから、この問題に直面してしまっただけなのだ。

私には、何もなかった。

例えば私は、本を読むのが好きだ。いつもこう言っているし、周りからはそう思われているだろう。けれど本当は、私は一ヶ月くらいなんの本も読まなくて何も困りはしないのだった。漫画もアニメも好きだけれど、それが全部なくなってしまったって多分困らない。いつもよりも睡眠時間が増えるだけだ。

例えば私は、小説を書くのが好きだ。これは本当のことで、一時期は狂ったように小説を書いていた。けれどこれだって、やらなければ死んでしまう、ということではない。実際、こうして再び小説を書き始めるまで、私は何も困ってはいなかったのだから。

例えば私は、カフェでのんびりとするのが好きだ。美味しいものを食べて、ぼんやりして、一人の時間を満喫する。本は、あってもなくても良い。マスターや常連客とは、話せても話せなくても良い。この時間は、心からリラックス出来る。けれどこれだって、数ヶ月間馴染みのどの店にも行かなくて、平気で過ごしてしまうようなものなのだった。

さて、困った。私が「好き」と主張出来るものは、これくらいしかない。物欲は強いほうではあるけれど、その分飽きるのは早いし、無理をしてまで買うほど欲しいなんてものにはとんとお眼にかかったことがない。趣味が人生の全てではないけれど、趣味のない人生なんてそれこそ、これほど詰まらないものもないだろう。私はその、詰まらない人生を歩んでしまっているのがある。

友人には、本気でサブカルチャーに人生を捧げているような人間もいる。バンドを組んでいて、色々なところでライブをしているような人間もいる。流石にそこまでではなくたって良いけれども、私は、「私にはこれがある」というようなものが欲しくて仕方がないのだった。そのくせに物臭で動きたがらないのだから、これほど厄介なこともなかなかないだろう。

「私にはこれがある」でも、「私にはこの人がいる」でも良い。それがどんなに無様でも構わない。私は、私を私として構成してくれるものが欲しい。

さてここで、「走馬灯が見たい」という戯れ言に繋がるのだった。

走馬灯というものを、私は見てみたいのです。叶うのならばね。

好きなことは、ある。大切な人たちは、いる。死にたいなんて、絶対ない。なんだかんだ屁理屈を捏ねながら、私は普通に生きていきたいだけの、普通の人間だ。

けれどときどき、自分が生きていることがとても気持ち悪いのも本当なのだ。当たり前のようにご飯を食べて、当たり前のように呼吸をしている。ねえ、一体何をしているの、お前？ そんな風に、自分に問いかけてしまうのだ。

好きなものはあっても、それがなくても生きられてしまう。無個性な自分が嫌だから、それが好きだと言い張っている面もある。

空っぽ。

何にもない、空っぽ。

私ってこういう人だよ、というのが、見事なまでに全くないのだった。

そういう訳で、走馬灯が見てみたいのだ。私、宮崎妙子は、走馬灯が見てみたい。

ほら、最後の最後なら、自分がどんな人間なのか、本当のところ判るかも知れないでしょう。私という人間にも心残りというものは存在するのか、あるとしたらそれは何なのか、それが見えたら、私は私という人間と初めて出会える気がするのです。

もしも何もなかったら、それはもうどうしようもないのだけれど。

私、宮崎妙子は、走馬灯が見てみたい。

唐突な書き出しで始まったこの散文の結論は、詰まりはそういうことなのです。

この文章に、意味はない。ここまで読んでくれている人間だって、いるかどうか怪しいものだ。読んでくれた方がもしもいるなら、ありがとう。貴重なお時間を使わせてしまっておめんなさい。

つくづく、私は最低な人間だった。正直な話、ここまで書き上げるのも途中で投げ出してしまおうと思ったのだ。

それでも書き上げて、衆目に晒そうとしている。それは、何年後かに、ふと自分の小説を読み返した拍子に、この文章が自分の眼に入るかも知れないからだ。どこにもアップせずに埋もれさせておくよりは、気付く可能性が少しばかり高かった。それだけの話だ。

この小説を読み返したときに、私は何を考えているのだろうか。もしかしたら耐えきれず、数日後には消してしまっているかも知れない。それでも万が一残っていて、この文章に気付いたときは。

相変わらず、くだらないことを考えているのだろうか。今よりは少しばかり、変わっているだろうか。

ねえ、貴方の生きている意味は何ですか。

けれど私にも、自信を持って言えることがある。それは、なんだかんだ御託を並べつつも、自分がとても生き汚いということだ。私は死ぬと言われて殺されそうになったら、それこそ死にものぐるいで抵抗するだろう。これだけくだらないことをぐだぐだと言っているそんなことを考えているのだから、多分私はもう暫くは、しぶとく生きているはずだった。

とても幸運なことに、友人にも恵まれた。劣等感を刺激されてばかりだし、嫉妬してばかりだし、恨めしく思うことだって少なくないけれど、それでも友人は大切だ。人間というのは複雑だよなあと、私はいつもそう思う。けれどきっと、人間ってそういうもの。

そろそろ文章を終えるはずなのに、ぐだぐだと引き延ばしてしまった。一先ず私は、将来の自分がほんの少しでも今よりマシな思考回路になっていることを期待して、ふとこの文章を読み返したときになんてくだらないことを書いているのだと自分で笑い飛ばすことを期待して、この言葉で締め括りたいと思う。

宮崎妙子は、走馬灯が見たい。